

は大学選手によるものだと言われている。

NCAA は、専従職員 70 人以上を持ち、執行部、事業部、審査部など五つの専門部を持つアマチュアスポーツ最大の勢力である。シーズン制、選手の数、コーチの数、学業成績基準、スポーツ奨学金の給付枠、新人スカウト等こまかいルールが決められている。

ルール違反に対しては、NCAA 審査部が調査して、違反大学にはプロペーションが科せられる。

スポーツ有力校は、体育局の予算を独立採算制でやっている。コーチの給料も体育局が独自に決める。コーチングスタッフの人事費が年間の体育予算の大部分を占めると言われる。

二つのハイデガー生誕百年記念の国際学会

総合科学部 小川 侃

今世紀の最大の哲学者といわれるマルテン・ハイデガーの百年目の誕生日が、今年めぐってきた。すでに年頭にミュンヘン大学の哲学科で記念の学会が催されたのを皮切りに、多くの記念の学会が催されたし、また催されつつある。それらのうちで最大の規模の国際学会は、「ハイデガーのアクチュアリティ」という統一テーマのもとに西ドイツのアレクサンダー・フォン・フンボルト財団がボンで開催したもの（4月24日から4月28日まで）であろう。更に、ドイツ現象学会も5月16日から19日まで「現象学とハイデガー」というテーマのもとにヴッベルタールで記念の会を開いた。私はこれらのうち最後の二つの会議に招かれて講演し討論に参加した。これらの会議の概要を報告することによって、少なくとも日々日本を離れていたことの責任の一端をおおうことができれば幸いである。

まず、ボンのフンボルト財団の主催の会議はつぎのようなものであった。質の高い奨学生研究員を諸外国から採用している同財団が西ドイツを代表するハイデガー研究者であるペゲラー (Pöggeler)、ヘルト (Held)、ヴィッサー (Wisser) と共に、過去の研究員のなかから重要な人々を再招待し、かれらに加えて、ハイデガーの直接の弟子であり、哲學的

解釈学の創設者のハンス・ゲオルク・ガダメー (Hans-Georg Gadamer) とハイデガー全集の編集総責任者であるフォン・ヘルマン (Von Herrmann) などをも招待して、ハイデガーの現代的な意義を問うという会議であった。日本から講演に招かれたのは、私の他に新田義弘、竹市明弘、有福孝岳、三島憲一の諸氏がいた。世界の各地からボンのバート・ゴーデスベルク地区（いわゆる連邦共和国の政治の中核部があるところ）のゲストスタッフ・シュトレイゼマン・インスティテュートとよばれる会場に、60人以上の発表者と30人以上の討論参加者が集まった。日本からの討論参加者には、谷嶋氏（東大教授）や學習院の門脇氏、神戸大学の大河内氏などが居た。（ついでに申しあげておくと、この会場は、食事も宿泊もできるようになっている会議場で、我が広島大学にもこういうのがあれば真の意味で国際交流の基礎となるとおもわれるような場所であった。いうまでもなく国際会議では、未知のひとと一緒に飲食をともにし議論を交わすということが重要だからである。宿泊場所が異なるのでは時間を心にかけて話をしなければなるまい。特に我が広島大学ではバス・電車の便を気にせねばならなくなるだろう。）



写真左よりガダマー氏、グロンダン氏、筆者、フォン・ヘルマン氏

この会議は、ペゲラー教授の影響が大きく、解釈学、ハイデガーと実践哲学ないし政治哲学、美学に力点が置かれていた。ヘルト教授は、「ハイデガーの根本気分の現象学」というテーマで基調講演をおこなった。それは、最近出版され研究者の待望久しい『哲学への寄与』というハイデガーの遺稿集をふんだんに使って論究したものであった。驚きを根本気分として読み、新しい始まりに結びつける。ガダマーは、「ハイデガーとギリシア人」というテーマで基調講演をおこなった。ガダマーの講演は、老大家の講演でハイデガーへの思い出話の趣きがあった。ペゲラーは、「ハイデガーと政治哲学」というテーマの講演をした。このテーマは、最近の流行問題、つまりハイデガーとナチズムの関係に関わっている。これは、もともとファリアスがフランスで点火したのちに、ドイツのみならず世界の至るところで反響を呼んでいる事柄である。この問題をペゲラーはあくまでも史実的に探究した。ちょうどファリアスの書物（『ハイデガーとナチズム』）がドイツ訳されたばかりであり、またフゴー・オットのなぜハイデガーがナチズムに走ったかを扱った書物『ハイデガー——伝記への途上で』が出版され、議論の土壤は充分に耕されていたのである。特にアメリカとボーランドの学者たちが講演のあとでの討論の場でハイデガーのナチへの加担を攻撃したとき、ガダマーが立って「あの時代と共に生きていたものにしか分からないし、私はまだからこそ言えるのだが、ハイ

デガーがナチになったのにはやむをえない面があった」と明確に弁護したのは感動的でさえあった。ただしこのような問い合わせたが、事象にもとづいた哲学的な議論にならず、どちらかといえばハイデガーが何年にどうした、どう述べたというような墳末主義におちいった議論が多かったのは残念である。

フッサー全集の編集者としても、また現代のポップ・アートについての現象学的研究で有名なビーメルはハイデガーの弟子であり友人であった。ヤスパースとハイデガーの往復書簡について話したが、これは「骨董屋」の講演という評判であった。新田氏の発表は「見えざるもの」の現象学にかかわるものであったが、ふたりのカナダの学者、マコミックとグロンダンに「見えないものについてかかることができる」のは、なにを根拠にして、またいかにして可能か」と問われて、三島氏という優れた通訳者を横に据えていたにもかかわらず何ら答弁することができなかった。氏が、このように、ゲーの音でのないまでに叩きふせられたのは氣の毒であった。京都大学の竹市氏は、個体性と歴史の問題を扱かい、有福氏は、カントとハイデガーとを上手に比較した。三島氏は、70年安保における学生運動を支えた実存主義とハイデガーの実存とナチへの加担の親和性をあつかった。私は、ハイデガー哲学は果たして翻訳可能かという問いを扱った。私の前によくにた問題を扱ったのは、フォン・ヘルマンとスミス（英国人）だった。フォン・ヘルマンは、ハイデガーが翻訳をどのように考えていたかを、ハイデガー精通者らしくまとめた。これにたいしてスミス氏は、ハイデガーのみならず、ドイツ哲学は一般に英語に完全に翻訳されえない、と述べたがその根拠は必ずしも明瞭ではなかった。私は、現象学と構造言語学の記号理論を駆使してハイデガーの言語と翻訳についての思想に問題があると指摘した。翻訳は唯名論を容認せねばならないのに、ハイデガーは反唯名論的な言語思想をもっているからで

ある。

私の講演の内容をふくめてボンの会議の内容については『南ドイツ新聞』の1989年5月2日に報告されているので興味のあるかたは、御参照いただきたい。

ヴァッペルタールのドイツ現象学会のほうは、主としてドイツ人の学者が中心となる会議であった。主な講演者は、リーデル、フォン・ヘルマン、ビーメル、ヒュニー、アイセリング、ヘルト、ヘフナー、竹市、ゲートマン、ヴォルピ、タミノー、ペグラー、小川などであった。ガダマーは講演することになっていたが、その前日に急に熱をだし、ハイデルベルクにもどった。90歳の高齢であるから、無理はない。この会議の基調講演は、ハイデガーのもっとも古い弟子である、マックス・ミュラー（ミュンヘン大学退休正教授）がおこなった。ロムバッハ（ヴュルツブルク大学）も招かれていたが、家族の病気のゆえに突然会議を断念するむね通告してきた。

ミュラーの講演は、ハイデガーと現象学への熱情に溢れたものであった。ハイデガーの哲学を現象学の歴史のうちで位置づけるという意図でなされたこの講演は、この老頑童の神髄を示し感動的であったのみならず、これから現象学のなすべき事柄への提言を含んでいた。フォン・ヘルマンは、「道と方法」というテーマで、ハイデガーの思惟の道を近代的な哲学の方法概念から区別した。ビーメルは「現象学の教師としてのハイデガー」に

ついて語った。ハイデガーの草稿が古いドイツ文字（いわゆる亀の甲文字）の筆記体で書かれており、読みにくいくこと、ハイデガー自身が何度も読んだ草稿には色鉛筆で印が付けられていることを述べてから、ハイデガー全集の編集総責任を担うフォン・ヘルマンに会場で試しに問うた。赤鉛筆は何を意味し、黄色は何を意味するかと。問われた人フォン・ヘルマンが、正解を与えたのはさすがであった。黄色は自己批判、赤は強調を意味すると。またハイデガーの演習のやり方をわれわれに伝えてくれた。ハイデガーの演習は緊張に満ちたものであって、思惟のうちを動かしていくものを問い合わせ、参加者にみずから考えるようになしむけたものであった。どのような哲学的な知識を前提することも要求しなかった。また、その演習ではハイデガー風に考えることやハイデガーの語いをつかうことは許されなかった。ヘーゲルの大論理学の演習でも形而上学のロゴスを見るようにすることが求められた。テクストを現象学的に解釈する第一原理は事象自身を明らかにすることにあった、と。

ヴァッペルタールは、エンゲルスが生まれた町である。ある夕べには、エンゲルスの家が記念館になっていて、その見学をおこなった。市長（女性）が世界のいろいろな所からやって来た哲学者たちに挨拶し、その後でレセプションがおこなわれた。その御馳走は大変なものであった。ドイツがいまでも哲学を大事にするということに深い感銘を受けた。